

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスベース

(宮古・大槌・釜石・障がい者センターかまいし・大船渡・米川・石巻・福島デスク・原町・もみの木・CTVC)

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

震災から5年3か月を迎えようとしていた頃、突然の訃報が届けられました。カリタス大槌ベースを設置し、ベースとともに歩いてくださっていたサレジオ会の古木眞理一神父様がお亡くなりになったのです。仙台教区サポートセンター長の平賀司教様が、追悼の言葉をお寄せくださいました。また、ちょうど、大槌ベースのスタッフに、原稿をお願いしていたのですが、はからずも、ベース長片岡さんと、スタッフの生利さんが、それぞれ、古木神父様のお教えを思い出しながら書いてくださいました。さらに、熊本でのボランティア活動の体験記を林愛子さんに書いていただきました。熊本支援センターの活動の模様を写真でもお知らせいたします。今後とも、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

ヨセフ古木 眞理一神父様ご逝去を悼んで

仙台教区司教 マルチノ平賀 徹夫

6月9日朝9時過ぎ、携帯電話に届いたのは、古木神父様の訃報でした。えっ、いつ？と聞くと、夕べのことらしい、との答えでした。

3か月前の3月に長崎へ行ったとき、古木師は入院治療中と聞いたので、では仙台に帰る前に必ず寄ろうと決め、研修会を終えた3月5日の午後、長崎大学病院に師をお見舞いしたのです。そのときは随分とお元気そうで、「高見大司教さんも、おお、元気そうじゃないか、だったら早く幼稚園の方の手伝いをしてもらえたら有難いなあ、なんて言われたんですよ」などとおっしゃり、「退院したらまた仙台教区にも行きたい」ということで、それは実現不可能なことではないと見たのでした。

古木師には、東日本大震災発生直後から本当にお世話になりました。長崎教会管区が設置してくださったカリタス大槌ベースの責任者として3年ほどにもなるでしょうか、その間、長崎と大槌間の運転、片道1泊2日で何回往復されたのでしょうか。サポート会議をはじめ、頻繁に開かれる会議等への出席、現場では被災地をこまめに回ったり、行政の方たちとの折衝や話し合い、被災された方々のために九州フェアを催したりと、復興支援活動を文字通り先頭に立ってお働きくださいました。

あるとき、ベースでの活動に関して、「わたしたちは単なる人道支援の活動をしているのではない。イエス様の心をもって働き、それが現われるような、伝わっていくような働きとなるようにいつも心がけなくちゃ」と言われました。そうだそうだと、思ったことでした。

66歳とのこと。早すぎます。でも致し方ありません。今は、ご復活のイエスさまと固く結ばれ、地上の生のあいだ信じ、希望し通した永遠のいのちの喜びを楽しむ恵みが、豊かに与えられますようにとお祈りいたします。



2013年3月全ベース会議時の古木神父様（前列右）

カリタス大槌ベース 新年度になって

カリタス大槌ベース ベース長 片岡 英和

大槌ベースも新年度に入り、スタッフの入れ替わりがありました。2013年から務めてくれた那覇教区の亀岡さんが退き、大槌町民である道又さんが新スタッフとして加わりました。これからのベースの活動を考えると、地元スタッフが増えたことは、大きな力になると思います。

と、これからのベース活動を考えていた矢先、大きな訃報が入りました。大槌ベース立ち上げより尽力された古木神父様が、6月8日にご逝去されました。最初の一報を耳にしたときに大きな脱力感に襲われました。その一か月前に長崎でお会いしてお話ししたばかりだったので、なかなか信じる事が出来ませんでした。これから先のベースのことなど、まだまだいろいろ一緒にお話ししたかったこともありましたが、役目を終えて天に帰られたんだろうと思います。古木神父様も見守ってくださっている中で、ベース活動を変わず頑張ろうと思います。



大槌ベースの分かち合いやお茶っこに参加する古木神父様

さて、新年度になり大槌ベースの活動ですが、被災者を中心という基本的な理念に変更はありません。昨年度末に社協と、仮設住宅、復興公営住宅でのお茶っこの在り方について話し合いの場を持ちました。これから先は、公営住宅でのお茶っこも増やしていくことで一致して、その活動のメインは、社協にお願いすることに。大槌ベースとしては、その活動をサポートするという今までの形をとることになりました。仮設住宅でサロンを始めた当初から、コミュニティとして確立するまでやはり時間がかかったことを考慮すると、これから長い時間活動することが出来る社協が、公営住宅へかかわることのほうが適任だと思われます。仮設住宅では、支援員の体制も変わり、常時待機している仮設もあれば見回りのように支援員が回ってくる仮設もあり、その中でも支援員がいない小さな仮設で重点的にお茶っこサロンを開催しています。基本的に今までと変わりませんのでスタッフと住人の間に生まれたつながりを大切にしていければと思っています。



仮設住宅でのお茶っこ(左)と公営住宅でのお茶っこ(右)

外での活動のメインとなっているのは、大槌川河川敷で行っているコスモス畑プロジェクトです。今年、岩手で行われる国体において、大槌でも競技が開催されます。その際におもてなしの意味を込めて花いっぱいを迎えるというコンセプトのもと、地元住民の方と一緒に手を入れています。この活動では、地元の方が自分たちの町のためにやるという気持ちを大切にしながら支援出来ればと思います。



コスモスプロジェクト活動の様子

大槌ベースは、2011年12月のベース開所から活動を続けてきましたが、活動期間が5年を過ぎ、町の状況を考えて2017年度末で現体制での活動を終了しようと考えています。これまで培ってきた人間関係などを思うとまだまだ続けていきたい気もしますが、そのたびに古木神父様の言葉を思い出します。「ベースとして活動が続いている間は、その地にとって非日常だということを頭にとめておかないといけない。ベースの活動が終わり、町の人に『ボランティアはもういらないよ』と思われた時こそ、その活動は成功したといえるんじゃないかな」。活動を始めた当初にはなかなか理解できなかった言葉です。大槌の町民にとって良かったと思っていただけるような活動をこれからの期間も頑張ります。

熊本でのボランティア —真のボランティア精神とは何かを考えた カリタス大槌ベース 生利 望美

5月13日、熊本県菊池市にある熊本支援センターに入った。ボランティアは、菊池市から車で約40分の西原村へ通っている。

西原村は、熊本地震によって、隣接する南阿蘇村や益城町と同様、甚大な被害を受けた。村内の約2,650棟の住宅のうち、500棟近くが全壊、1,253棟が半壊した。なかでも布田川・日奈久断層上の集落の被害は大きく、余震や雨による倒壊（二次災害）の恐れがあるため、ほぼ全ての住民が集落を離れ、避難所や車中泊をしている。6月17日現在、西原村では、535名の住民が避難所での共同生活をし、64名が車中泊をしている。



活動初日は週末ということもあり、主に、九州各県からのボランティアが列をなしていた。私たちはボランティアセンター開設のチラシを持って一軒一軒お宅を訪ねた。そのエリアは一見すると外観はさほど被害を受けていないように見える。しかし各家にはその建物が大丈夫かどうかを診断した結果が赤、黄、緑の紙で張り出してあった。赤紙は入ること自体危険であることを表している。その辺り一帯は、赤

紙が多く、人の姿がほとんど見えなかった。家を開けっ放しにしているお宅も多かった。住民を見つけると必死で追いかけていき、「ボランティアセンターが開設されました！何かお手伝いできることがあれば…！」と声を掛けた。必死で声をかけることしかできなかった。

その日の夕方、社協の方と話をする機会があった。「カリタスさんは長期ですか？長期でおられるならば避難所へ来てほしいのですが…」

次の日、センター長と話をついにいった。西原村構造改善センターにある西原村福祉避難所。ここには約20世帯、40人くらいの方が避難していた。多くは福祉を必要としている人たちだった。ここは24時間体制で、看護師、保健師が常駐している。「カリタスさんには専門家とは違う視点で、住民さんを見守ってほしい。避難所から仮設へ、仮設から復興住宅へ移っていく段階で、コミュニティを大事にしながら住民自ら地域活動をしていけるよう、その種まきのお手伝いをしてほしい」と社協の人は話していた。

次の日、2名のボランティアと共に避難所へ行った。熊本は30度を超える暑さ、そのうえ湿度も高い。じっとりとした空間に段ボールのベッドが並んでいた。そこに、ただただ横たわっている人たち。歩くだけでも一苦労な状態の人も。そんな中、避難者と1対1で関わっている姿はほとんど見られない。私たちは一人ひとりに声を掛けていった。一人ひとりに合わせて、話を聴いたり、散歩へ連れ出したり。



西原村福祉避難所の皆さんと(2016年5月)

昼食時間になり、私は衝撃的な光景を目の当たりにした。コンビニのおにぎり2個と野菜ジュースが配られていた。朝はコンビニの菓子パン、昼はおにぎり、夜はコンビニ弁当という食事がずっと続いているようだ。それでも有り難い、とお年寄りたちは文句ひとつ言わず黙って食べていた。中には食事が喉を通らない人もいたが、物資倉庫には、レトルトのおかずなどもたくさんあったが、食中毒予防のため出さないという役場の方針。お菓子などいろいろな種類がたくさんあったが表に出していなかった。選ぶ楽しみがあるだろうと、気を利かせて表に並べてみたが、役場の人が突然来て一言。「こげんもんばかり食べとるけん、飯ば食わんとよ」と…。黙ってられず、「お菓子を食べてるからご飯を食べないんじゃないんです！毎日コンビニ食だからじゃないですか？」と思わず言ってしまった。「そうですか…」と役場の人は黙ってその場を離れた。

翌日行ってみると、お菓子はすべて撤収されていた。聞くところによると、保健師さんから、高血圧の人が増えているので気を付けるようにと、指導があったのだそうだ。長期でいる人はいろんな変化を見ている。いきなり来た者が口を挟むことではない…と深く反省した。

東日本大震災のボランティア活動をする中で、亡くなった古木神父がよく言っていた言葉を思い出す。「我々は町の応援団でいなければいけない。町がどこへ向かおうと足並みを揃えて同じ方向を向いていくこと。相手がどうしたら幸せになれるのか、考えなさい」と。「相手が」何を望んでいるかを感じて、その人が喜ぶことをしなさい。これが真のボランティア精神。それが、あの場でどのくらい、できていたのだろうか。本当にできていたのだろうか。ここに戻ってからまた、考えていた。避難所で出会った一人ひとりの顔を浮かべながら。また、会いたくなった。けれどしばらくは自分の居るべき場所で、その心を育てていきたい。

熊本支援センター（くまセン）での活動

京都教区登美ヶ丘教会 林 愛子

5月16日-20日まで、菊池市にある「カリタス福岡・熊本支援センター」にお邪魔させていただきました。

熊本駅に着くと、街中のあちこちでヘルメットや長靴を持ったボランティアの姿を見かけました。熊本駅から支援センターまでバスで移動しましたが、駅を出てすぐ、痛々しい熊本城が現れ、車窓から見える景色の中にはブルーシートで覆われた屋根が所々に見えました。菊池プラザというバス停から歩いて温泉で有名な菊池市にある熊本支援センターに向かいました。

教会には優しい神父様がおられ、教会前を通って行く支援センターに案内してくださいました。もと幼稚園だった建物が支援センターとなっており、そこではシスター方が迎えてくださいました。スタッフさんはボランティアさんと共に朝から活動へ出かけておられました。私が行った時は具体的なボランティア活動は、瓦礫撤去と避難所の訪問の2つに分かれていました。

支援センターについた翌日から、私は益城町の隣にある西原村の避難所での活動に参加させていただきました。テレビのニュースを通して見てはいたものの、初めて実際に目にする避難所にやはりショックを受けました。生活環境としてプライバシーの確保が難しい状況、食中毒が問題になったこともあり、朝はパン・お昼はおにぎり・夜はコンビニ弁当という食事など、今までの生活が奪われ、本当につらく大変な生活を強いられ、これからどうなるのかも分からない状況に私に何ができるのかと考えてしまいました。

さらに県内外からの応援の役所関係者や保健師・歯科衛生士・介護士などの医療関係者やボランティアさん、日々変わっていくメンバーとの連携の難しさを感じながらも、避難されている方々に寄り添えること、自分たちにできることを始めました。それは掃除をしたり、一緒にお話ししたり、折り紙を折ったり、マッサージをしたり……本当に小さいことからですが、これを継続していくことがボランティアとして来ている私たちができることなんだろうな、と感じました。

数日の関わりの中で得られることは限られていると思いますが、ここで見て、聞いて、感じたことはたくさんの方に伝えたいと思います。避難所にいる方々と話していて、いちばん印象に残ったことは、この自然のこと。活動先に行くまでに見える山の姿や一面に広がる畑、自然豊かなキレイな景色には元気をもらいました。本当に素敵なところです。

立ち上がったばかりの熊本支援センターで真っ黒に日に焼けたスタッフさん、パソコンと格闘しているシスター方、本当によく頑張っておられるなあと思います。また、東日本大震災のボランティア経験者や初めての人、遠くから近くから若者も昔そうだった人もたくさんのボランティアさんが来ておられました。また機会があればぜひ行きたいと思います。

東日本大震災のことは忘れない。もちろんどちらも継続して活動を続けて行くことが大事なんだと思います。つらい状況にいる人たちが一日も早く元気に心から笑顔になれる日を願って、ここでの体験を心に留めておきたいと思います。



熊本地震

ボランティア募集及び募金の呼びかけ

「カリタス福岡・熊本支援センター（くまセン）」では、被災地におけるボランティアを募集しています。また、カリタスジャパンとカトリック福岡教区において、引き続き募金の呼びかけを行っています。皆様からのご支援・ご協力をお待ちしております。

遠く離れた東日本大震災被災地からも、心を寄せて、少しずつでも「ともに前に」という気持ちで応援しています。

《くまセンでのボランティアをお考えの皆様》

・カトリック福岡教区のホームページ内の「ボランティア募集」についてよく読みいただき、お申し込みください。

<http://fukuoka.catholic.jp/ejsien.html>

※インターネット環境がない場合は、電話でお問い合わせください。

【カリタス福岡・熊本支援センター ボランティア受付窓口】

電話 080-2709-0237（受付時間 8時～19時）

FAX 0968-24-8209

ボランティア受付メールアドレス kumasen.vol@gmail.com

〔くまセンの主な活動（2016年6月現在）〕

●西原村・益城町ボランティアセンターの活動

被災家屋の片付け手伝い、瓦礫仕分け、避難所の屋内、屋外(仮設トイレ・シャワー室)の清掃など。



●西原村福祉避難所での活動

環境美化（トイレ、フロア、廊下、玄関、下駄箱の掃除）や傾聴など。



●小教区ニーズ

一人暮らしのご老人宅やアパートの部屋の内壁が剥がれてしまったお宅のお手伝いなど。

【熊本地震 募金送付先】

●カリタスジャパン

郵便振替番号：00170-5-95979

加入者名：宗教法人カトリック中央協議会 カリタスジャパン

※通信欄に、「熊本地震」とご明記ください。

※お寄せいただいた募金は、福岡教区「支援室」およびその他の団体による支援活動のために活用させていただく予定です。

●カトリック福岡教区

郵便振替番号：01760-6-20729

加入者名：カトリック福岡司教区

※通信欄に、「熊本地震支援金」とご明記ください。

※お寄せいただいた募金は、教区の判断により、教会の修復やカトリック関係の被災者支援にも活用されます。